

札幌建協

橋の点検・補修で研究会

技術支援システム構築へ

橋梁の長寿命化と適切な更新をシステム化するため、札幌建設業協会

(岩田圭剛会長)は、学者や設計、施工の技術者と自主研究会を設置



橋梁の効率的な維持管理と更新を実現する検討が始まった

し、25日に北海道建設協会館で初会合を開いた。橋梁の点検・補修手法確立を通じて、受発注者の双方がメリットを得られるシステム構築に向けて検討を開始。成果は、維持管理に悩む道内市町村への普及を図り、本道独自の技術支援につなげる。自主研究会は、北大大学院の佐藤准教授を座長に建設コンサルタンツや設計、施工会社の技術者14人で構成。橋梁の長寿命化を図る上で、最も難点とされる点検・補修の問題を克服し、維持管理と架換の理想的なサイクルを確立する。会合は、2014年3月まで1カ月半に1回の割合で開催。初年度は点検・補修の現状を分析し、

課題をまとめる。最終年度で点検・補修マニュアルを作成して市町村への技術支援を検討する。佐藤准教授は、システム構築に向けて①コンクリートの維持管理からコンクリート構造物の維持管理②財源確保から性能確保③性能確保に向けた人材確保の3点を強調。「劣化のメカニズムは資材や部分で語れない。性能を確保する説明責任が求められる。高度な解析法を使いこなせる人材の養成が重要な」と理由を解説した。

その上で構造物の維持管理をめぐり、市民を巻き込みインフラへの関心を高める長崎大の「道守ユニット」や東大実験ができる名古屋大などの研究施設を紹介した。維持管理の課題は全国共通であるものの、各地で賦行錯綜が続き、本道は積雪寒冷という特有の問題解決を含め数少ない実践事例になると提起した。システムは、札幌建協が11年度にまとめた橋梁のトータル・マネジメント・システムとして実現させる。道路管理者や学識経験者、設計、施工経験者でつくる運営チームと自治体が連携するコンソーシアム(協議会)方式で管理する。佐藤准教授は「システムに携わる設計、施工業者が差別化、区別化され、優先的に受注できるシステムとなる。発注者にも品質管理や経済性からメリットがある」と意気込みを解説した。

橋梁TMS自主研究会が初会合 「定量把握」目指して 25年度まで2ヵ年で活動展開

札建協

一般社団法人札幌建設業協会(岩田圭剛会長)が、事業構想の第二弾として取り組む橋梁トータル・マネジメント・システム(橋梁TMS)の具体化に向け、自主研究会(座長・佐藤靖彦北大大学院工学研究院准



教授)の活動がスタートした。二十五日に道建設会館で初会合を開き「写真Ⅱ、二十五年度末まで二年弱の期間で活動を展開していくことを確認。活動の在り方については、佐藤准教授が維持管理の向かうべき方向が「定量把握」にあることを紹介し、高度な手法も使える形で、行政などとの差別化を図っていくことを提言した。

修、長寿命化補修に関し、必要な技術力をもった業者を適格者として登録。当該業者から、各業務を担当する者を選定する内容を想定している。

最終的には行政も含めた形を目指す。当面は設計者、施工者、学識者による自主研究会での取組を段階的に試行。その活動を通じて、行政や一般市民の理解を得た上で、最終形のシステム構築を目指すこととした。

MISは、協議会方式(コンソーシアム)によるシステム構築を目指すもの。各種マニュアルの作成、研修・講習の開催、救急対応などを進めていく中で、日

常点検、緊急補修、LCM研究会と土木技術会から各一人の計十四人の委員で構成。この日の初会合では、これまでの経緯、先進事例や学協会等の動向を確認したあと、今後の活動について佐藤准教授が方向性を提示した。

佐藤准教授は「最先端の研究と最前線の現場では乖離(かいり)がある」としながらも、「向かうべき方向は定量把握」とし、定量把握のための視点として①材料ではなく構造物の維持管理②財源確保から性能確保③性能確保に向けた人材確保1を提示。「材料としての耐久性は分かっている

が、実環境での効果を把握することは大変難しい。物理化学的な知識や判断力も求められる」とし、新たなルールづくりを進めていくイメージを示した。

これに基づき意見交換では、「行政のマニュアルとの差別化が必要」「目視で問題点を把握できるようなマニュアルも」「点検そのものは誰でもできるが、どのレベルを目指すしていくのか」といった意見や指摘があり、今後の検討課題とした。

次回は九月十一日の開催を予定している。